

戦後70年 — 証言者が絶えた後を見据えるドイツ

梶村道子(ベルリン・女の会)

ナチズムの犠牲者を追悼する日

日本ではあまり知られていませんが、1月27日はドイツでは「ナチズムの犠牲者を追悼する日」です。1996年以来毎年、この日には連邦議会で追悼式典が持たれ、国民を代表する立法府が、行政・司法権の代表や被害者を迎えて、12年に及ぶナチスの暴力支配と6年に渡る絶滅戦争の犠牲者を思い起こ

します。列席者は、犠牲者を代表する来賓の証言に耳を傾け、その様子は公共放送のチャンネルの一つで中継されます。今年のように、加害国の後継国たるドイツの大統領が来賓演説をする年もあります。

多様な被害を語る来賓とともに追悼・想起する

1月27日はアウシュヴィッツ強制収容所が1945年にソ連軍の手で解放された日です。しかし式典で想起され追悼されるのは、狭義のホロコースト犠牲者に限られません。

ラムメルト連邦議会議長は今年の挨拶で、「権利を奪われ、苦しめられ、殺された人々——欧州のユダヤ人、シンチ・ロマ、エホバの証人、何百万もの連行されたスラブ人、強制労働者、同性愛者、政治囚、病者と障害者ら、ナチ・イデオロギーの敵だとして迫害された全ての人々」を追悼し、「しばしば命を賭けてまで、抵抗し、他人を守り、助けた人々」、「生き残り、トラウマに苛まれ続けた人々」、さらに「家族や友人を失った記憶を抱えて、後に残された人々」を思い起こしました。

当然、証言する来賓も、被った被害も多様です。例えば2014年の式典に招かれたロシアの作家ダニール・グラニンさん(95歳)は、900日に及ぶドイツ国防軍のレンゲラード市包囲の体験者です。2014年1月27日は、ドイツ軍の空爆や砲撃に晒され、補給路を断たれ、80万とも100万ともいわれる市民の命が奪われた、その包囲からの解放70年目の記念日でした。志願兵として包囲を生き延びたグラニンさんにとって、憎しみから相互理解と友好に至る道程は、戦争に費やしたよりも遥かに長いものだったといえます。グラニンさんが「その道程を経て」招待に応じてくれたことに、連邦議会議長は厚く礼を述べました。

「アウシュヴィッツはドイツのアイデンティティー」

追悼の日に因み、今年もメディアではサバイバーの証言が報じられましたが、少年期に被害を被った彼らもいまや高齢者です。ナチスの犯罪の証人たちがいなくなるのは遠

いことではありません。では、それ以降もなお、ホロコーストを想起するとはどういうことなのか、ドイツの市民にとってアウシュヴィッツの将来的意味は何か。戦後70年に当たる今年の式典ではそのことが問われ、ガウク独大統領は主賓演説においてこう答えました。「アウシュヴィッツなしにドイツのアイデ

ンティティーはあり得ません」「ホロコーストを想起することはドイツに生きる全市民の為すべきことです。それはこの国の歴史の一部なのです」。

証言者の絶えた将来も、追悼の形こそ変われ、この歴史への関心が薄れることはないだろう、なぜなら過去を想起し記録する、証言者世代の孫や曾孫の世代が出現しているからだ。大統領は言います。彼らは前の世代より遥かにこだわりなく過去と向き合うことができ、タブー視され取りこぼされた家族史を掘り起こし、地域のユダヤ人の足跡を調べ、迫害者やその被害者の伝記を読むのだと。

証言者世代の喪失は、加害者世代の消失でもあります。それはドイツが続けてきたナチズムの犯罪者の処罰がもはや不可能になることです。「だが道義上の取り組みには終わりはない」と連邦議会議長も述べます。この社会には、市民の手になる多様なイニシアティブが培い担ってきた、記憶し記念する文化環境が存在するからです。

犠牲者に再び名前を与え記憶する「踏きの石」にろうソクを灯す。犠牲者が最後に住んだ家の前の舗道にプレートを埋め込む市民の取り組みは、ベルリンだけですでに5000を超える。(筆者撮影)



証言者なき後も過去を想起するために

この追悼の日は、戦後50年を機に制定されました。これを定めた1996年の大統領宣言は、証言者なき後も過去を想起し続けられるよう、「未来に響きかけるような想起の形を見出すときだ」と言っています。一方、戦後50年目にしてようやく被害者に詫言を見つけた「村山談話」は、今、葬り去られようとしています。でも、私たちはこの日独の落差にただ暗澹としている訳にはいきません。この20余年、アジアで被害者と市民が明らかにしてきた貴重な証言と史実を、今こそ若い世代に伝えていくときです。連邦議会議長の言うように、私たちが「証言者の証人になっていく」ときののです。